



# 「服の一生」テーマの映像作品

## 国際情報学部“市ヶ谷姉妹”が優秀賞受賞

### 第29回ワン・ワールド・フェスティバル



ワン・ワールド・フェスティバル動画コンテストで優秀賞を受賞した国際情報学部の若松亜実さん(左)と澤井美空さん▲

国際情報学部の村田雅之教授のゼミに所属する澤井美空さん、若松亜実さんの4年生2人が、2021年度後期のゼミ活動で制作した「服の一生」をテーマとした映像作品が、第29回ワン・ワールド・フェスティバル動画コンテストで優秀賞(学生部門)を受賞した。

ゼミで学修している社会心理学や教育心理学、メディアリテラシーなどから得た知見を映像に落とし込み、その表現力や情報発信力の高さなどが評価された。“市ヶ谷姉妹”の愛称で応募した2人は「受賞できるとは思っていなかった。率直にうれしい」と喜んでいる。

# 澤井美空さん、若松亜実さん 村田ゼミの学びが生きる

## 「つくる責任、つかう責任、つなぐ責任」を考える

受賞作の『つくる責任、つかう責任、つなぐ責任。服の一生を考えた事はありますか？私にできる事もきつとある。』は、視聴者にこのタイトルの言葉を問いかけるところから始まる54秒の作品だ。

シンクに置かれたコップに水が注がれる映像と「服1着を生産するために使う水 コップ11,500杯分」「私にできることは？」のテロップを組み合わせた、ハンガーにかかった衣類に手をかける映像に「人や環境のことを考えた製品を選ぶ」という文字をオーバーラップさせたりと、視聴した人の記憶に残るよう、試行錯誤を繰り返した。村田教授やゼミの仲間にも意見やアイデアを求めたという。

結びの場面は、市ヶ谷田町キャンパス前の歩道から空を見上げる映

像に、「地球を、考えよう。」「未来に、つなごう。」の文字が浮かび上がり、SDGsのロゴが映し出される。印象的なエンディングになっている。

「地球を」「未来に」の直後に読点を入れた理由を尋ねると、2人は「(読点を入れることで)作品の余韻が残り、この問題を考えてほしいというメッセージに結びつくと思った」と説明してくれた。

## 映像にメッセージ性と高い訴求力

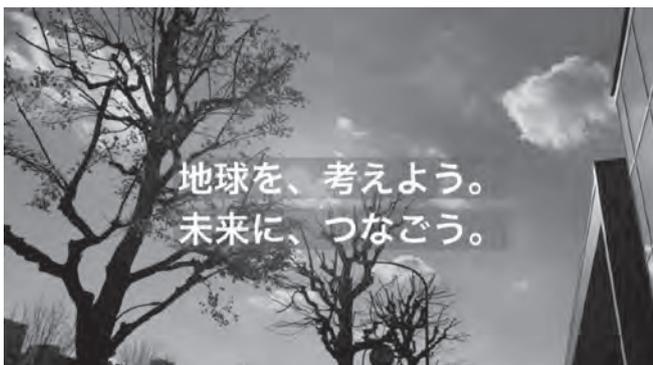
制作のきっかけは2021年夏ごろ、若松さんがYouTubeで見た洋服の動画だった。洋服の中には、生地が薄かったり縫製が甘かったりして耐久性の低い製品も少なくない。動画の中で「ワンシーズンだけ着て捨てればいいのか」という言葉が耳に残った。

洋服について調べていくと、その年に生産される半分以上が廃棄され、劣悪な環境の生産現場で働く人たちがいることも知った。2021年度後期のゼミの課題が「映像制作」(自由テーマ)だったため、学びの中で取り組んでみよう、と澤井さんに声をかけたという。

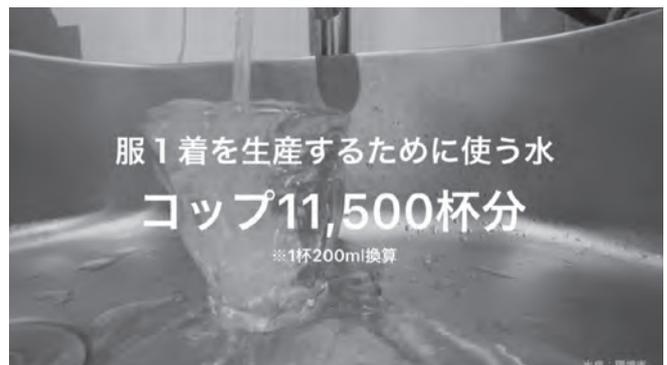
「安く大量に生産する『ファストファッション』の現状を知ってもらい、私たちも何かできることがあると伝えたい」(澤井さん)。動画にはそんな思いが込められている。

2人は、村田教授のゼミで「映像でも、文字や文章でも、それを受け取った人がどう感じるだろうかということに思いを寄せて表現し、発信する」ということを常に心がけて、学んできたという。受賞作は54秒という短い時間にメッセージ性が込められ、訴求力の高い作品に仕上がった。ゼミの学びが生きた会心作とっていいのではないだろうか。

▼エンディングのメッセージ「地球を、考えよう。未来に、つなごう。」



▼シンクのコップにあふれる水を映し出すシーン



若松さん

「アンテナを広げて興味、課題を見つけない」



受賞を喜ぶ澤井美空さん(左)と若松亜実さん

澤井さん

「今回の経験を社会人としても役立てたい」

2022年2月の受賞時に国際情報学部3年生だった澤井美空さん、若松亜実さんは、2023年春には社会人となる予定だ。

将来のことを尋ねると、澤井さんは「どの企業も環境問題などに目を向けて積極的に動いている印象があります。今回の映像制作の経験を社会人としても役立てていきたい」、若松さんは「環境だけに限らず、興味を持ったことにどうアプローチしていくか。社会人としてアンテナを広げて、課題や関心のあることを見つけない」と、それぞれ前向きに答えてくれた。

## ◇第29回ワン・ワールド・フェスティバル

国際協力機構関西センター、国際交流基金関西国際センター、アジア協会アジア友の会、大阪青年会議所などで組織する実行委員会が主催。フェスティバルは、SDGsの達成や国際協力を目的として、セミナーやステージ活動、動画コンテスト、スポーツなどを通じて、関係機関やボランティアなどさまざまな人たちの活動・連携のプラットフォームの役割を担う。コロナ禍のため、第29回は今年2月、前回に続きウェブ上で開催された。

動画コンテストは90秒以内のストーリーが条件。市ヶ谷姉妹は、澤井さんがネットでコンテスト開催を知り応募したという。

受賞作は  
こちらからご覧に  
なれます。



寿司チェーン大手の「すしざんまい」展開  
中大OBの木村清社長が講演会



# 「人が幸せになる 良い社会をつくるために生きる」

流山白門会主催



自身のキャリアやビジョンについて講演する木村清社長＝千葉県流山市文化会館



中大通信制で学んだことなどを振り返った  
(左は総合司会を務めた曾根純恵さん)

寿司チェーン大手の「すしざんまい」を展開する喜代村社長で中央大学OBの木村清さん(70)が5月28日、千葉県流山市で講演し、「食を通して、明るく笑顔で平和な世の中をつくっていくのが私の夢であり使命です。こういう世の中をつくりたいというビジョンを持って生きていきましょう」と呼びかけた。講演後は、感染症対策を徹底した上で、木村社長と同社の職人たちがマグロ解体ショーを実演した。

講演会は、卒業生でつくる中央大学学会の流山白門会(高橋洋会長)が主催し、司会進行は中大OGの曾根純恵さん(日経CNBCキャスター)が担当。小中学生から大人まで約150人が木村社長の話に熱心に耳を傾けた。

## 中大で学ぶ一方、 水産業でも頭角

千葉県野田市出身の木村社長は、1979年に中大法学部(通信制)を卒業した。司法試験を目指して学ぶかたわら、在学中に水産会社にアルバイトとして勤務したことが、水産業の世界で頭角を現すきっかけとなった。近年は、東京・築地市場(現在は豊洲市場)のクロマグロの初セリでの高値落札が有名。「マグロ大王」の異名でも知られている。

この日の講演は、働くことの意義や、仕事への姿勢などを学ぶ「キャリア教育としての職業人講話」と題して開催された。

木村社長は、4歳のときに見上げた大空を飛ぶ飛行機を見て、パイロットにあこがれたことや、中大での法律学修について「六法全書などを図書館で読むと大体頭に入り、

試験も良い成績だった」こと、記憶力は「45歳までは電話帳を持ったことがない」と語るほどで、顧客や取引先など約400社の情報をそらんじていたことなど、これまでの自身の歩みを紹介。

その上で、勉強でもスポーツでも「だらだらやることではない。集中してやること」と訴え、基礎や基本の大切さを説いた。さらに「私はあきらめない。あきらめたときに失敗なんです。あきらめなければ失敗しない」と熱っぽく語りかけ、「熱い思いや夢を語ってほしい。目標をもってやっていきましょう」と呼びかけた。

### 「胸を熱くして夢を語る」

「胸を熱くして夢を語る」という木村社長の言葉通りに講演は時間の経過とともに熱を帯び、聞いている人を引き込んでいく。

社員を採用するときの話では、志望理由を「生きるため、生活するため」という人は、残念だけれど縁がないと説明し、「何をしてもうけるかではなく、どんなものがあると皆が喜ぶか(を考えてほしい)」と強調した。「こういう世の中にしたい」というビジョンの大切さを繰り返し訴え、「何のために生きるか」の答えは「人が幸せになるため、良い社会をつくるためでしょう」と結んだ。

マグロ解体ショーの実演では、北大西洋でとれたという重さ150キロの見事な本マグロを木村社長自ら包丁でさばいた。

講演後、中大法学部で学んだことを尋ねると、木村社長は「法律的なものの解釈ということがとても勉強になった。物事を多方面から見ることの大切さを学びました」と話していた。

木村社長(右から4人目)と職人がマグロ解体ショーを実演した=千葉県流山市文化会館▼





# 『コロナ禍の困難と オンライン留学が繋げた スクールロイヤーへの志』

中央大学が実施した「コロナ禍に負けるな！戦う中大生の未来を拓く奨学支援論文賞」の最優秀賞に、法学部2年(受賞当時1年)の佐々木望恵(もえ)さんの論文『コロナ禍の困難とオンライン留学が繋げたスクールロイヤーへの志』が選ばれた。「最優秀という名前の賞をいただいたのは初めてです。驚きましたが、徐々に実感がわきました」と喜びを振り返っている。

## スクールロイヤー

教員やスクールカウンセラーらと連携しながら、学校で生じるさまざまな問題について、弁護士の立場から助言を行う。文部科学省は2020年度以降、本格的に相談体制の整備を進めている。

# 最優秀賞に佐々木望恵さん(法2)

## 「前を向いていることを示したい」

論文中には、進学すること、法律を学ぶことなどに対する佐々木さん自身の真摯な思いが表れた言葉や表現がいくつもある。

コロナ禍の中で過ごした高校3年の受験の時期、部活動の最後の大会も中止になり、虚無感の中で受験勉強をしていた。中学を不登校となり、高校受験を控えて家にこもりがちな妹のことも心配で、両親を含めた家族の心は不安定だった。唯一の救いは「自由」を思い描いていた大学に、あと数カ月で入学できるだろうということ。第1志望では

なかった中央大学に進学すると決めた2021年春、自らの意思で浪人の道を選ばなかった当時の胸の内を次のように記している。

《不安を抱えた家族に対して、私は前を向いていることを示したいと思ったのです。都合の悪いことの責任をコロナに全て持たせるのは、正しくないと考えます。(中略)私にとっての困難は、自分と家族の状況について心の平穏が保てなかったことです》

大学で法律を学びたいと思った理由の根底には、「正しい道歩んでいきたい」という中学時代からの

熱い思いがあった。「正しいことに対する“執着”から、正しいことと、正しくないことの線引きを学びたいと思っていました」。当時から憲法に関する本を読むなどしていたという。

## 夏休みのオンライン留学が“転機”に

論文は、高校時代から力を入れて学んでいた英語に関する記述へと続く。法学部の「やる気応援奨学金」制度を活用して夏休みに4週間のオンライン留学をした経験から、秋学期の英語の学修により前向きに取り組めるようになり、先輩との



## コロナ禍に負けるな！ 戦う中大生の未来を拓く奨学支援論文賞

第30回中央大学ホームカミングデー特別奨学支援事業として実施された。2020年初めから続くコロナ禍にあって、経済的な困難や修学環境・学生生活の急激な変化に見舞われながらも、懸命に学修などに取り組んでいる現状に関する論文を2021年11月～2022年2月に募集した。中央大学の学部（通信制課程を含む）、大学院、専門職大学院に在籍する学生が対象。課題テーマは「コロナ禍に生きる私、コロナ後における世界の展望と私の未来」（4000字以内）で、174編の応募があった。

ホームカミングデー運営委員会で開催した審査委員会による厳正な審査の結果、最優秀賞のほか、優秀賞3編、奨励賞4編、特別賞23編などを決定した。この特別奨学支援事業は、「新型コロナウイルス対策支援奨学金募金」の趣意に沿って実施され、副賞（奨学金）は中央大学学生会（同窓会）から同募金への寄付を財源としている。

最優秀賞の佐々木望恵さんの論文と、優秀賞3編などはこちらから読むことができます。



会話の中で、「スクールロイヤー」という言葉を知ったという。

妹が家にこもりがちになった理由はわからないままだが、佐々木さんはいじめや不登校について強く問題意識を持つようになっていた。そして、スクールロイヤーについて先輩から話を聞き、インターネットで調べたりするうちに、「将来、自分の中心にしたいことはこれだ」と確信を持つようになる。

## 「やるべきことを見つけられたことがとてもうれしい」

スクールロイヤーになるのに、現状で教員免許は必要ではない。しかし、学校や生徒の問題を把握し、解決するには、生徒の心理状況や

学校現場、教員についての深い理解、専門的な知見も必要だと考えており、教員免許の取得も目指している。そう決意した2021年12月から法曹の道を目指す学生の研究棟「炎の塔」入室に向けて勉強を始め、今年3月に入室試験に合格した。2022年度からは教職課程の科目も履修している。法律の学修と教職課程の両立で目まぐるしい日々を送りながらも、「やるべきことを見つけられたことがとてもうれしい」という。

「有言不実行は好きではないし、論文の中で目標を掲げたからには手は抜けないと背筋が伸びた」。教職課程には卒業要件ではない科目もあるが、「最優秀賞の受賞は、頑張っていく糧になった」と励みにしている。

佐々木さんは、論文を前向きな決意で結んでいる。

《この1年間は、まさに点と点を線で「自由に」繋ぐような1年でした。様々な経験はどのような結論になるかは分からない、ということを実感できたのです。(中略)スクールロイヤーという1つの答えを出すことができたのは、コロナ禍の今だからこそ達成できたことだったのだと思います。(中略)今では中央大学に入学できたことがとても嬉しく、強く誇りを持っています。来年度(注・2022年度)は、大学で過ごす時間も増えるでしょう。大学に自分の居場所を見つけられるように、そしてその場所で、大学でようやく見つけることができた自分の夢を叶えるために、精一杯の努力をします》



炎の塔▲

### 佐々木望恵さん

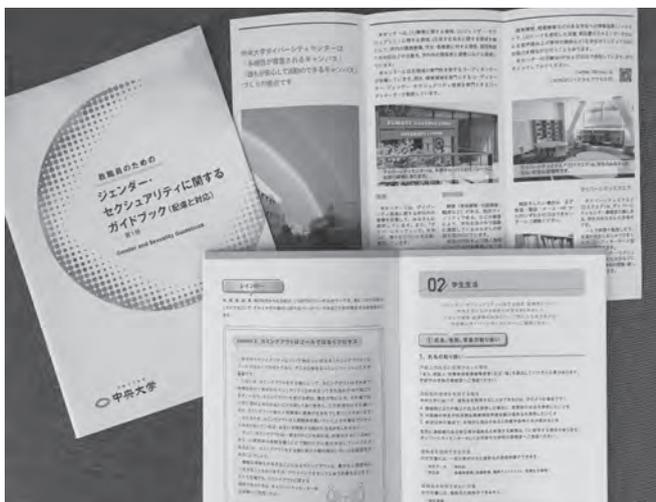
ささき・もえ。千葉・市川高校卒、法学部法律学科2年。奨学支援論文賞に応募した理由を尋ねると、「きれいな文章に心ひかれます。もともと文章を書くことが好きでしたから」と答えた。性格は「おっとりしているとよく言われるんですが、本当は誰よりも負けず嫌いです。中大のサークルでは体操愛好会に所属している。

## ジェンダー、セクシュアリティを知り、学ぶ 「学生のためのハンドブック」 ダイバーシティセンターが作成



ハンドブック作成に携った長島佐恵子教授(左)と子安加余子教授=多摩キャンパス「ダイバーシティスクエア」

中央大学の学生や大学院生らに、ジェンダー、セクシュアリティについて分かりやすく解説したハンドブックを、中央大学ダイバーシティセンターが作成した。ジェンダーやLGBTQに関する用語や基礎知識、学生生活に関わる氏名・性別・写真の取り扱い、各キャンパスのトイレ、更衣室、シャワー室、授乳室の利用に関する案内、ダイバーシティセンターの相談窓口を紹介しているほか、Q&Aやコラムも掲載している。ジェンダー、セクシュアリティについて「これから知りたい・学びたい」という人にも適した内容だ。



気軽に少し立ち寄る一。▲

ダイバーシティスクエアはそんな「居場所」になっている

◀ダイバーシティセンター作成の「ジェンダー・セクシュアリティに関するハンドブック」など

## 「アウトティング」「アライ」言葉の意味を解説

ハンドブックでは、ジェンダー、セクシュアリティについて「用語」「学生生活」「Q&A」など6つの項目別に詳述されている。用語では、他の人のセクシュアリティを本人の了承を得ない状態で第三者に暴露してしまう「アウトティング」、LGBTQの理解者・支援者・味方として行動する人を意味する「アライ(Ally)」などの言葉の意味を解説した。

ハンドブック作成に携わった法学部の長島佐恵子教授は「マイノリティ性を持ついわゆる『当事者』の学生には、必要な情報と、大学が公式に取り組んでいるという事実を届けたい。ほかの学生にも自分と関係ないテーマではないことを知ってほしい」と意義を話し、ハンドブックには「キャンパスの人間関係を円滑に

する情報が詰まっている」と訴える。

経済学部の子安加余子教授も作成に携わった一人だ。授業の中でジェンダーやセクシュアリティの話をする、「アライになりたい」と理解を示す学生が増えてきたという。「ハンドブックは学生生活を安心して過ごすためのもの。ダイバーシティセンターも学生のための場でありたい」と話す。

## 「全員が自分ごととして考えてほしい」

ハンドブックの随所に掲載されたコラムでは、性的指向によって、ある属性の人を「普通の人」と表現することで、そうでない人を「普通ではないとみなしてしまう」ことにつながる指摘した内容や、生理用品を用意した多目的トイレや授乳室の整備の大切さを訴えた「誰もが安心して過ごすことができるキャンパスとは？」

といった5編を紹介した。

ダイバーシティセンターで当事者の学生らの相談を受け付けているコーディネーターの小川奈津己なつきさんは、「キャンパスにいる全員が自分ごととして考え、全員で大学の環境をつくっていききたい」と呼びかける。

中央大学は、2017年に「中央大学ダイバーシティ宣言」を公表し、性別や性自認、性的指向など、さまざまな背景を持つすべての人に、平等な学修環境、職場環境を提供するよううたっている。



ダイバーシティセンターのコーディネーター▲  
小川奈津己さん

# 誰もが過ごしやすい キャンパスを目指して

## ～中央大学におけるダイバーシティ推進を知る～

### 円滑な人間関係へ ハンドブックが道しるべ

中央大学ダイバーシティセンターは、「多様性が尊重されるキャンパス」「誰もが安心して活動のできるキャンパス」づくりの拠点として、障

害学生等支援、ジェンダー・セクシュアリティ、グローバル・多文化共生の3つの領域を軸に、学内の環境整備や学生、教職員への啓発、個別相談への対応などの活動を進めている。併設のダイバーシティスクエアは学生の居場所として開放され、上記3

領域に関する書籍や資料を借りることもできる。

私は「HAKUMON Chuo」の学生記者として、ダイバーシティセンターが4月に発行した「学生のためのジェンダー・セクシュアリティに関するハンドブック」について、作成に

学生記者  
森美樹  
(文3)



携わった法学部の長島佐恵子教授、経済学部の子安加余子教授、学生の相談を受け付けるコーディネーター（ジェンダー・セクシュアリティ領域）の小川奈津己<sup>なつき</sup>さんの3人に取材する機会を得た。

取材でうかがった話によれば、ハンドブックは、大学の各部署がすでに対応していたジェンダーなどに関する事柄を集約するイメージで作られたという。

たとえば、生協で購入できる大学指定の「履歴書・自己紹介書」はキャリアセンターの方針で他大学にさきがけて性別欄をなくしていた。また性別違和のある学生が一定の手続きで学生証の写真を変更するなどの対応も以前から全学の指針によって行われていた。

ただ、個々の学生はもちろん、対応した教職員も、プライバシーの問題もあって、個別のケースの詳細な情報を部署を超えて共有できていたわけではない。つまり、“経験”が受け継がれているわけではなく、情報も「知る人ぞ知る」にとどまってしまう。新たに悩みや問題を抱えた人は、「そもそも中大でそれは可能なのか」という地点から出発するしかなかった。常に「道なき道を行く」状態だったといえる。そうした情報をわかりやすく見せるために工夫が凝らされたハンドブックは、「そこはすでに

道があるよ」ということを示している。

## ダイバーシティセンター 「困りごとを共に考える場」

ダイバーシティセンターのある多摩キャンパスの「FOREST GATEWAY CHUO」に授乳室があることもハンドブックで紹介されている。「学内に託児所があったっけ？」と私はピンとこなかったが、主に搾乳のスペースとして使われているとのことだった。

これまでは搾乳したい場合、授業の合間にトイレを利用するしかなかったという。盲点だった。実際にトイレで搾乳した経験を持つ教員や学生もいると聞く。子安先生は「困りごとを抱えているときはそれに対処するだけで精いっぱい、どこかに訴えるという余裕もない」点を指摘し、「本当に支援が欲しいとき、本人は何もできないことが多い」と続けた。

長島先生は、センターを立ち上げる前に他大学で同様の取り組みをしている教職員への聞き取りを重ねたという。その中で、「マイノリティ性のある学生に『どういうことで困っていますか』と尋ねても、『困っていません』という返事しか返ってこないかもしれない。しかし、日々会話を重ねていくと、あらゆる場面、あらゆるところで困っていると分かることがある」と

教えられたそうだ。

長島先生は「本人が変えて欲しいと言ったことだけを変えるのでは十分ではない。おしゃべりしているうちに困っていることが出てきて、ダイバーシティセンターがそれをどうしたら変えていけるのかを一緒に考えていける場になっていけばうれしい」と語った。

## キャンパスに居場所があることの重要性

実際、センターはそんな場所になりつつある。対面授業主体になった4月からは少し立ち寄りという利用の仕方が格段に増えて、相談目的で来たわけではないのに、話の流れで相談になったこともあったと、コーディネーターの小川さんは話す。居場所があることの重要性と、そこから声を吸い上げられていることを肌で感じているそうだ。

取材を通して、私は改めてダイバーシティの重要性を実感した。誰もが過ごしやすいキャンパスを、誰もが生きやすい社会を実現するためには、さまざまな人のニーズを知り、一緒に解決に向けて考える必要がある。その基礎にある考え方がダイバーシティなのだ気づいた。遠くない未来に、誰もが過ごしやすいキャンパスは実現できる。そんなビジョンが見えた気がした。

「学生のためのジェンダー・セクシュアリティに関するハンドブック」はA4判24ページ。PDF版が公開済みのほか、印刷された冊子も配布している。あわせて「教職員のためのジェンダー・セクシュアリティに関するガイドブック（配慮と対応）」（A4判20ページ）も公開された。こちらから閲覧できます。

